

譲歩的共同行為

三木那由他 (Nayuta Miki)

大阪大学大学院

共同行為とは、複数の人々が一緒になっておこなう行為を指す。例えば私とあなたが一緒に大きな机を運ぶならそれはひとつの共同行為であるし、ダンスカンパニーが一丸となって舞台上でパフォーマンスをしたならば、それもひとつの共同行為である。共同行為を一般的かつ直観的に特徴づけるなら、グループによってなされる行為が共同行為であると言うことができよう。

共同行為論における基本的な問題は、単なる個別の行為の寄せ集めと本物の共同行為を区別する基準とは何か、というものである。そしてその基準は、外から観察できるような行動上の特徴に言及することでは与えられないと広く考えられている。例えば雨が降り出すのと同時に公園中のひとが傘をさすというのはふつうひとつの共同行為を成しているとは考えられず、降雨という同じ現象をきっかけに各人がばらばらに個別の行為をしたに過ぎないと理解される。だがもしその公園にその時間にいるひとたち全員がある種のパフォーマンス集団であり、降雨をきっかけに一斉に傘を開いてパフォーマンスを始めることになっていたとしたら、その人々が傘をさすのは共同行為の一部となるだろう。たとえ外から観察する限り人々の行動がこの両方の場合において寸分違わず同一であったとしても、事情は変わらない。それゆえ共同行為論においては、行動上の特徴以外の何かが単なる個別の行為の寄せ集めと本物の共同行為とを区別するための基準を与える、と考えられている。

分析哲学における近年の共同行為論は、主に Raimo Tuomela、John R. Searle、Michael E. Bratman、Margaret Gilbert という四人の論者を中心に展開してきた。トゥオメラは *we* モードという特殊なモードの意図、サールは特殊な目的 - 手段関係に置かれた意図、ブラットマンは特殊な内容の意図を持ち出し、またギルバートは意図の共有という現象を共同的コミットメントという独自の規範的な概念のもとで理解するという違いはあるが、この四人は参加者間の意図の共有が共同行為には必要であると考え点では一致している。また、これらの論者は、意図が共有されているという事実が参加者間の共通知識となっていることもまた、共同行為には必要であるとしている。

2010 年代以降、ミニマリズムと呼ばれる立場から共同行為について再検討する論者が現れるようになった。ミニマリズムの議論においては、従来の議論で想定されてきた典型的な共同行為の事例とは違い、非典型的だがしかしそれでも共同行為とは言えるような事例を取り上げながら、共同行為を成立させる最小限の条件を絞り出すということが目指されている。その結果として、代表的な四人の論者が共同行為の必要条件と見なしてきた共通知識が、実は共同行為には必要ではなかったという議論(Blomberg 2016)や、それどころか共通知識が存在しないことが前提となっている共同行為の可能性を指摘する議論(Shönherr 2019)が展開されるとともに、共同行為にとって必要なのは意図

の共有ではなく目的の共有なのではないかという問題提起もなされている(Butterfill 2012)。

だが、そうしたミニマリストの議論においても、まだ問い直されずにいる前提が少なくともひとつ残っている。それは、共同行為を開始する際に人々が共有する目的(ないし意図)はその達成が当の共同行為の遂行に当たるような目的となっているという前提だ。例えば一緒に散歩に行くという共同行為について言えば、まず一緒に散歩に行こうという目的の共有があり、人々がその目的の実現のためにそれぞれの貢献を果たし、そしてその目的が達成されたなら一緒に散歩に行くという共同行為が遂行されたことになる、とミニマリストも含めたほとんどの論者が想定している。これは言い換えるならば、ある集団がいかなる共同行為がなされているかはその行為が開始される時点で決定されており、そして人々は一貫した仕方でのその行為の遂行を目指しているものと想定されている、ということである。

本発表では、この想定に反する一群の事例が存在すると論じる。私が「譲歩的共同行為」と呼ぶ事例においては、共同行為が開始されたあとにその行為の参加者が当初の目的に反する振る舞いをし始め、それにもかかわらず他の参加者がそうした逸脱に譲歩してしまった結果、もともとなされていたはずの共同行為が次第に別の共同行為へと変化していき、最終的に遂行された共同行為がその行為の出発点において参加者たちが目指していたのとは別物になる。譲歩的共同行為がどのような現象であり、それが共同行為論においてどのような問題を引き起こすか、そして譲歩的共同行為をうまく扱うための枠組みはどのようなものとなるのか、また譲歩的共同行為の存在からどのような含意が得られるのか。本発表ではこうしたことを論じる。